



い、高め合う教室へ

学びの“質”を高める——それは現在、世界の学校教育が直面している課題だ。
教員の指導力向上に着目した埼玉県は、
授業に「知識構成型ジグソー法」を取り入れ、子どもの力を総合的に伸ばしてきた。
その経験が今、フィリピンの授業を変えつつある。

埼玉県



埼玉県

人口約730万人。「生きる力を育て、絆を深める埼玉教育」を県の教育理念とし、産業人材やグローバル人材の育成、インクルーシブ教育などに積極的に取り組む。県の「学力・学習状況調査」は、“学力の伸び”を測ることのできる全国初の学力調査。子どもの成長と、教育委員会や学校の取り組みの変化の関係も検証できる。



実験によるエキスパート活動を行うフィリピンの高校生。「資料は効果的で、教員がよく準備して作ったことが見て取れました」と遠藤さん

知識そのものの習得から 知識を活用する力の習得へ

議論や発表など、子どもたちを能動的に授業に参加させる教育法は、通称「アクティブ・ラーニング」と呼ばれ、思考力や判断力、表現力といった人としての総合的な力を伸ばす指導法として、近年注目を集めている。埼玉県は他県に先駆けてアクティブ・ラーニングを取り入れた地域の一つ。同県教育委員会は、2008年から「東京大学CoREF」と連携し、CoREFが提唱するアクティブ・ラーニングの手法である「知識構成型ジグソー法（以下、ジグソー法）」の共同研究を進めてきた。

ジグソー法とは、教師が設定する問いについて、子どもたち自身が調べ、自分の言葉で説明したり、教え合ったりしながら、一人一人の学びを深める学習法だ。具体的には、「エキスパート活動」「ジグソー活動」「クロストーク活動」の3つの活動に子どもたちは参加することになる。エキスパート活動では、同じ資料の内容を数人で話し合うグループ活動を通じて、各人が「専門家」として知識を身に付けていく。次のジグソー活動では、このグループを分解して、異なる資料を読み込んだメンバーで編成する新グループを作り、エキスパート活動で身に付けた知識や自分の考えを互いに説明する。こうして個々の知識を組み合わせながら問いへの答えを導き出したら、クラス全体の活動へと展開し、各グループが回答とその根拠を発表する。これがクロストーク活動だ。

大事なことは、この3つの活動の前後に

互いに学び合



ジグソー法による授業を受けるフィリピンの小学生たち。子どもたちは「友だちと教え合いながら勉強できるのが良い」と話し、楽しみながら学びを深めていた

一人で問いの答えを考察する時間を設け、グループでの学びを経て、自分の理解が深まった点、あるいは考えが変わった点を振り返ること。その名称から連想されるとおり、知識というピースをジグソーパズルのように組み合わせ、答えを求めていくのが特徴だ。

埼玉県は2010年に県内の高校教員を対象として、ジグソー法を活用した授業の研修に着手した。埼玉県教育委員会の県立学校部高校教育指導課で「学びの改革担当」を務める遠藤宏之さんは、「授業への試験的な導入期間を経て、2012年からは採用1年目の教員研修でもジグソー法を扱い始めました。今後は小中学校にも広げていく予定です」と説明する。

こうした先進的な取り組みを進めている埼玉県は、2012年から5年間、JICAの草の根技術協力事業を通じて、ブラジルの貧困地域の教育支援を手掛けた実績を持つ。昨年1月から



ジグソー法を使った授業体験。授業の進め方だけでなく、良質な問いであるほど、学びの効果が高くなることや、エキスパート活動の内容をどう設定するかがポイントであることなどを実感した



プロジェクトメンバーと共にセブ州管轄教育事務所での会議に出席する遠藤さん(左)。遠藤さんは英語の教員免許を持ち、ジグソー法紹介のプレゼンテーションなども担当した

は、JICAとの2年度目の教育協力事業として、フィリピンの授業改善を目指すプロジェクト「埼玉版アクティブ・ラーニング型授業による授業改善のための教員研修支援」を推進している。それ

さん、CoREFの研究者、埼玉県立総合教育センターで教員研修を運営する職員、ジグソー法を活用した授業実践の豊富な経験を持つ「マイスター教員」などのメンバーだ。

**授業が変われば生徒も変わる
フィリピンの学びの質を高める**

近年、フィリピンは初等・中等教育の充実を力を入れているが、教員の指導力の向上が課題だ。「私たちは、フィリピン中部のセブ州セブ市とマンダウエ市内の小・中・高、各1校でジグソー法の導入を目指しています。フィリピン教育省のセブ州管轄教育事務所などの幹部にジグソー法とは何か説明することから活動がスタートしましたが、皆、好意的に受け止め、期待を寄せてくれています」と遠藤さん。現地の教育の現状の収集に当たっては、県からJICAに向向している教員とも連携したという。

プロジェクトでは、現地の教育行政職員と3校の先生たちを埼玉県に招いて行う研修と、そこで身に付けたことの実践状況を確認するためのフィリピン訪問を2回繰り返した。1回目の研修では3日間わたって、CoREFの担当者がジグソー法の講義を行った他、県のマイスター教員も指導役に加わって、ジグソー法を体験する先生たちに、教員目線でアドバイスをを行った。先生たちは、「すぐに学校で実践してみたい」と意気込んでいたという。

さらに、研修では県内の小学校で児童たちがジグソー法を用いて、理科の「種

子の発芽と成長」の単元を勉強する様子も視察。この他にも、高校の部活動の見学や、生徒による英語での学校案内を通して、日本の学校教育の文化や成果を幅広く紹介した。「その後、現地視察に行くこと、理科や数学で早速ジグソー法を取り入れられていました。最初の研修から3カ月目とは思えないほど高いレベルです。また、子どもたちが英語を使って活発に議論する様子に、県のマイスター教員たちも大いに刺激を受けていました」と遠藤さんは語る。

次に日本で行った研修には、新たなメンバーを招き、問いの立て方やエキスパート活動の内容の設定の仕方をより重点的に教えるなど、1回目の研修の反省点も生かした。再度の現地訪問でも、先生たちは効果的な授業を展開していたという。「今年度は、過去の研修員から参加者を選んで、同じ学校の先生にジグソー法を普及してもらうための指導本を作ってもらう予定です。秋の研修は行政職員向けとし、国としてジグソー法を普及していく仕組みを築くためのハンドブックを作成しようと思っています」と遠藤さん。

一人一人の子どもの能力を伸ばすには、まずは授業を変えていかなければならない。埼玉県教育委員会のこの信念が教員の指導力の向上、ひいては子どもたちが確実に力を付けられる授業の実践につながった。ブラジルやフィリピンでの取り組みを通じ、埼玉オリジナルからグローバルスタンダードへ、という県のキャッチフレーズは着実に具現化しつつある。